

7 きょう土の伝統文化と先人たち

① 報徳の教えで苦しい村を立て直した

伊藤七郎平

「はじめに働き、節約して、貯金し、自分の身のたけにおうじた生活をする」という報徳の教えで、まずしさで苦しむ深見村(今の今井地区)の人々や周りの人々を救い苦しい村を立て直しました。



② 農業しやすい土地に変えた 永井五郎作

海蔵寺の南側は、一度足をふみ入ると、なかなかぬけ出すことができない深い田でした。また、あぜ道は曲がりくねっていて、はばもせまく、農作業をするのに大変不便なところでした。五郎作は人々の苦勞を見て、入り組んだ田をそばんの目のように整理し、道や水路を作ろうとしました。だれもが納得する正かくなそく量をするには大変苦勞しましたが、こう地整理によって、今まで使えなかった土地も田になり、人々のくらしは楽になっていきました。



③ 今井用水を作った

大場九左衛門

江戸時代の初めごろ、小山の名主大場九左衛門は、日でりでこまっていた小山の村人や周りの村々の人々を救おうと、太田川から用水を引くことを考えました。多くの人々を説得し、長い年月をかけて今井用水が完成しました。用水のおかげで米がたくさんとれるようになりました。

① 伊藤七郎平が報徳の教えでたて直した深見村

大場九左衛門が作った今井用水

③

西尾只吉がほった大日のトンネル

④ 自分のざい産を投げ出して道を作った

高塚太郎平

1882年(明治15年)、人々の行き来をしやすくし、産業をさかんにするために、天竜川から原谷川までの15kmの道を作りました。20mのトンネルや7つの切通し、10数か所の橋を作る大変な工事でした。この道路を作るために自分のざい産を投げ出し、人夫とともに働きながら、わずか4年で道路を完成させました。この道路は「太郎平新道」といわれ、今でも地いきの人々の役に立っています。



④ 高塚太郎平が作った太郎平新道

② 永井五郎作がこう地整理をした所 国道1号

⑤ こう地整理で人々のくらしを豊かにしようとした

名倉太郎馬

彦島地区は三つの川が合わさっているため、村人は水害になやまされていました。太郎馬は村人を救おうと、1872年(明治5年)自分の田の4分の1をみんなのために使い、改良実験を行いました。仕事量がへったり、しゅうかくがふえたりするなど、こう地整理が有こうであることをしめし、村人とともにこう地整理を進めました。日本で最初のこう地整理事業の成功だといわれています。



⑤ 名倉太郎馬がこう地整理をした所

戸倉惣兵衛がくわ畑を作った所 ⑨

⑩ こまっている人々に手を差しのべた

浅羽佐喜太郎

浅羽佐喜太郎は助けを求めてくる人にはだれにでもやさしく、手を差しのべる人でした。医者である佐喜太郎は、治りょうひがはらえない人からは、お金をとることをしませんでした。当時、フランスにし配され苦しんでいたベトナムからのりゅう学生たちにも進んでしえんを行いました。ベトナムどく立運動の指どろ者の一人、潘佩珠もその一人です。



⑥ 石川知至郎が開こんした茶畑

浅羽要衛武が開こんした茶畑

浅羽要衛武が開こんした水田

⑦ 原孫三郎が開いた柳村

⑧ 戸塚弥三治がこう地整理をした所

浅羽要衛武が作った道路

⑥ 草地を開き茶畑をかいこんした

石川知至郎

1913年(大正元年)、石川知至郎はこれからの農業で一番お金になるものは何かと考え、草地を買い取り茶園として開こんを始めました。畑をどんどん大きく広げ、茶の葉をもむ機械も使っていました。茶でもうけたお金を、村の教育や福祉のために使いました。

⑦ 柳の村を開いた 原孫三郎

松原の北にある柳の地区は、水作物にあたるのに不便な土地でした。人々は度重なるきょう作と重い年ぐに苦しみ、土地をすててにげる人もいました。村役人の孫三郎は人々を救おうと、横須賀藩(今の掛川市)の役所にお願ひに行きました。年ぐをへらしてもらうことは大変なことでしたが、孫三郎の村人を思う気持ちがみとめられ、年ぐをへらしてもらうことができました。その後柳の地に自分の子どもたちを住ませ、土地を開いていきました。

⑧ こう地整理をした 戸塚弥三治

1860年(万延元年)に新堀村に生まれた戸塚弥三治は、16才で戸長(村長)になるほど村人からしらいされていました。弥三治は「形の整っていない田は不便であるから、形を整えよう。」とよびかけました。はじめは、先ぞから受けついでた田の形が変わり場所がうつることをいやがっていた村人たちも、弥三治の熱意に動かされました。1901年(明治34年)、新堀村の田はきれいに整理され、たくさんの米がとれるようになりました。



⑨ 人々のくらしを豊かにしようとかわ畑を作った

戸倉惣兵衛

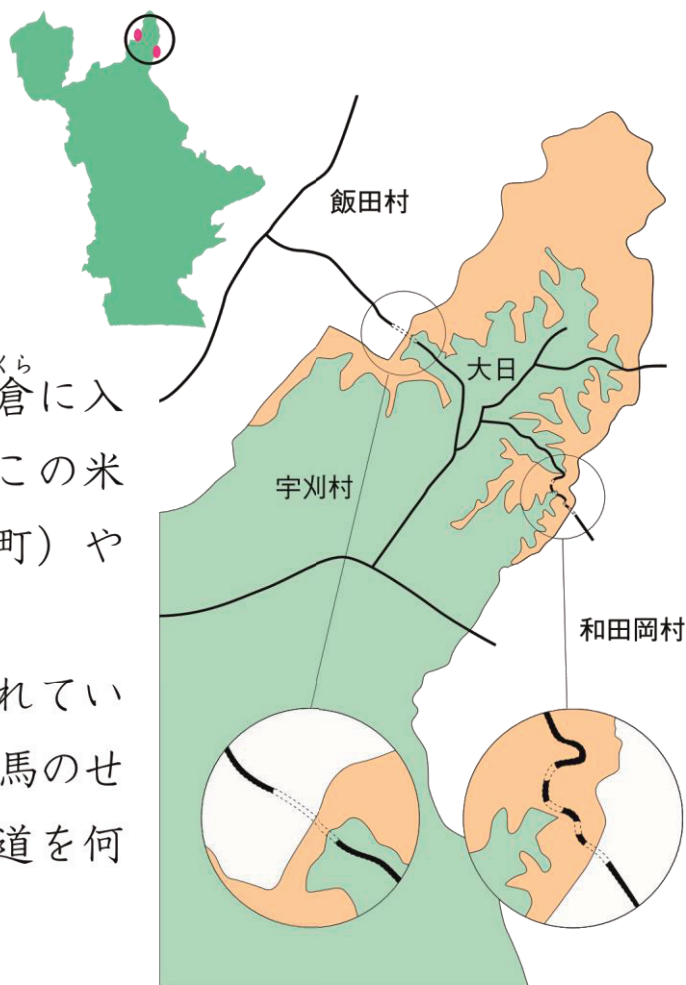
1887年(明治20年)、戸倉惣兵衛は人々の生活をゆたかにしようとかいこをかう計画を立て、あれ地になっていた菩提にかいこのえさとなるくわを植えました。当時かいこのまゆから作るきぬは高いねだんで売られていたからです。初めはなかなかうまくはいきませんでした。失敗をおそれず何度も勉強をし、工夫を重ねていながら、よいたまごをうませる方法を考えました。



1 村人のこんなんをすくうために トンネルをほった西尾^{にし お ただきち}只吉

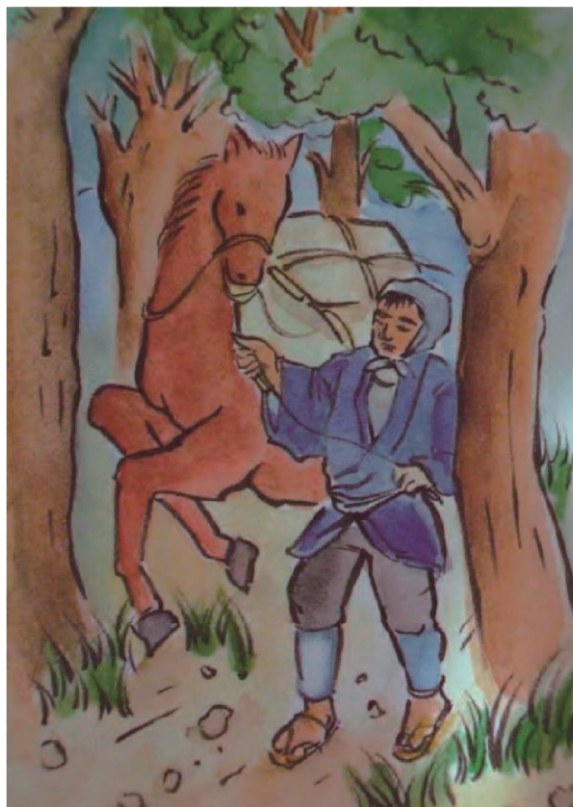
1827年（文政10年），宇刈^{う がり}村大日^{むらだいにち}（今の宇刈）に，西尾只吉は生まれました。只吉の生まれた大日地区は，おいしい米の産地^{さん}でした。とり入れのころになると，年貢米が倉^{くら}に入りきらなかったと言います。この米は，となりの飯田村（今の森町）や森町で売られていました。

大日地区は三方を山に^{かこ}囲まれていたため，運び出すには少しずつ馬のせ中につんで，急な坂のとうげ道を何



只吉の作ったトンネルの場所

度も行き来しなくてはなりませんでした。それは，気が遠くなるほどの仕事でした。村の人々は，となりの飯田村へぬける道ができてほしいと願^{ねが}っていました。そこで，只吉は，なんとかしてトンネルをほって，村人のこんなんを救いたいと考えました。1879年（明治12年）只吉52才のことでした。





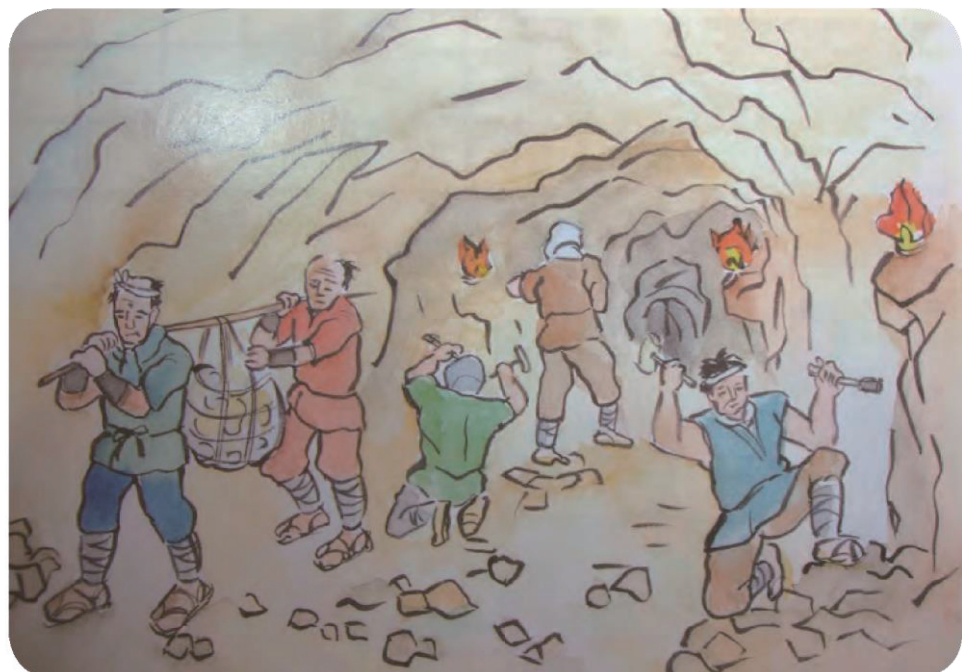
只吉は40才をすぎたころから目の病気にかかり、そのころはほとんど目が見えませんでした。しかし、よく見えない目で山の中を歩き回りました。毎日のように転んだり、谷に落ちたりしながらもあきらめずにそく量りょう つづを続けました。

また、只吉はまわりの村にも協力きょうりょをよびかけました。仕事は順調じゆんに進められるかと思われましたが、一番かんじんなトンネルの出口の村人がなかなかさん成してくれませんでした。只吉は何度も何度もとなり村に足を運び、トンネルがひつよう必要なことを一人一人に説明せつして回りました。只吉の強い気持ちの人々の心を動かし、2年かけてようやくとなり村の協力えを得ることができました。

※ そく量りょう：土地などの広さ・高さ・いちなどをきかいを使って正かくにはかること。

1881年（明治14年）、只吉が54才のとき工事が始まりました。工事にさん成してくれた人が入れかわり立ちかわり、くわやもっこを持って手伝い^{つだ}に来てくれました。やがて、初め^{はじ}は工事に反対していた村の人々も、手伝い^{つだ}に来てくれるようになりました。目が不自由な只吉も、みんなの先頭に立って一生けん命^{めいはたら}働きました。

只吉たちは、暗いあなの中をカンテラのわずかな明かりをたよりに、くわやのみで少しずつほり進めました。すな地をほらなければならぬので、たくさんの板やくいを使って、くずれるのをふせぎました。工事がむずかしいところにつき当たると、三ケ日（今の浜松市）にいるせん門の人にたのみにいきました。そんな時は、いくばんも家をあけました。そのため只吉のつまが病気になっても、かん病してあげられませんでした。とうとうつまは死んでしまいました。只吉はたいへん悲しみました。そして、つまのためにも、工事を成功^{せいこう}させようと、さらに働きました。工事にはばく大なお金^{ひつ}が必要^{ひつ}でしたが、山を売り、米を売り、そのお金のすべてを只吉が作り出しました。



1884年(明治17年),長さ約115メートルのトンネル(提ヶ谷新道^{つつがや})
ができあがりました。大日地区の人々は手を取り合ってよろこびま
した。

只吉がつくったトンネル
は,昭和7年から10年にか
けてコンクリート工事が
ほどこされ,大日^{ずいどう}隧道(ト
ンネル)と名付けられまし
た。さらに,平成9年に新
トンネルが完成し,大日か
ら飯田^{いいた}に通じるただ一つの
道路として,今も多くの
人々に^り利用されています。

只吉はこの隧道だけでな
く,和田岡原^{わだおか}(今の掛川市)
へ通じる4つのトンネル
もほりました。和田岡に
畑を持っている人達は畑
に行くのが楽になったと
喜び^{よろこ}合いました。この4
つのトンネルも同じよう
に,今も,地いきの大切
な道として,多くの人々
に^{つか}使われています。



今の大日^{ずいどう}隧道 (大日トンネル)



只吉がほった和田岡原新道トンネル



あさば ようえむ
浅羽要衛武

年	主なできごと
1832 てんぼう (天保3)	しば 柴村に生まれる。(旧浅羽町浅羽)
1854 あんせい (安政元)	だいかん 柴村代官所につとめる。
1862 ぶんきゅう (文久2)	茶を植えることを村人にすすめる。
1870 めいじ (明治3)	ぐん 山名郡の20の村の代表として平芝の役 所につとめる。
1879 (明治12)	くわ畑をつくりかいこをかいはじめる。 浅羽に私立銀行の「開明社」をつくる。
1890 (明治23)	きせん 汽船の「明進丸」をつくる。
1895 (明治28)	東浅羽村長となる。
1913 たいしゅう (大正2)	袋井駅までの道をつくる。 有料の橋を買い取って無料とする。 82才でなくなる。

浅羽要衛武年表(「我が郷土今昔」より)

2 村人の生活を豊かにするために働いた浅羽要衛武

年	主なできごと
1854 あんせい (安政元)	大地しんで多くの家 がつぶれる。
1855 (安政2)	大雨が続き米が3割 しかとれない。
1856 (安政3)	原野谷川のていぼう がこわれてこう水。
1857 (安政4)	長雨と冷夏のために 米が実らない。
1858 (安政5)	1年に2回原野谷川 のていぼうがこわれ て大こう水。

そのころの浅羽地区のさい害の記録
(「我が郷土今昔」より)



そのころ外国へ売られた茶の箱

浅羽要衛武は、1832年(天保3年)柴村に生まれました。要衛武が青年のころ、浅羽地区は大地しんとたびたびの大水で米がとれず土地があれば、村人はこまっていた。そのうえ、わずかばかりとれた米も、年ぐとして役人に取り立てられ、村人のくらしは苦しいものでした。柴村の代官所で働いていた要衛武は、村人のくらしを何とかして楽にできないものかと考えました。

このころ、日本とアメリカのものの売り買いが始まりました。アメリカへ売る日本の茶の量が、毎年ふえていることに目を付

けた要衛武は、赤松の林が広がっていた芝原の土地を切り開いて、茶を植えることを村人にすすめました。

しかし、村人たちは、「飯の足しにもならないお茶なんか、高く売れるわけがない。」と、だれもさん成してくれませんでした。要衛武はしかたなく一人で松の木を切りたおし、根をほり出しては土を平らにし、茶の種をまいていきました。これは後に3人の刀を持ったごうとうをたった一人で追いはらったほど強い要衛武にも、大変な仕事でした。このような要衛武のすがたを見て、茶の種を植える仕事を村人がしだいに手伝うようになりました。そして、ついには芝原一面に茶畑が広がるようになりました。



当時の茶畑作り（想ぞう図）

しば柴村の東には何十^{ヘクタール}haというあれ地がありました。ここは、水はけが悪く一年中水がたまっているため、農業に使うことができませんでした。

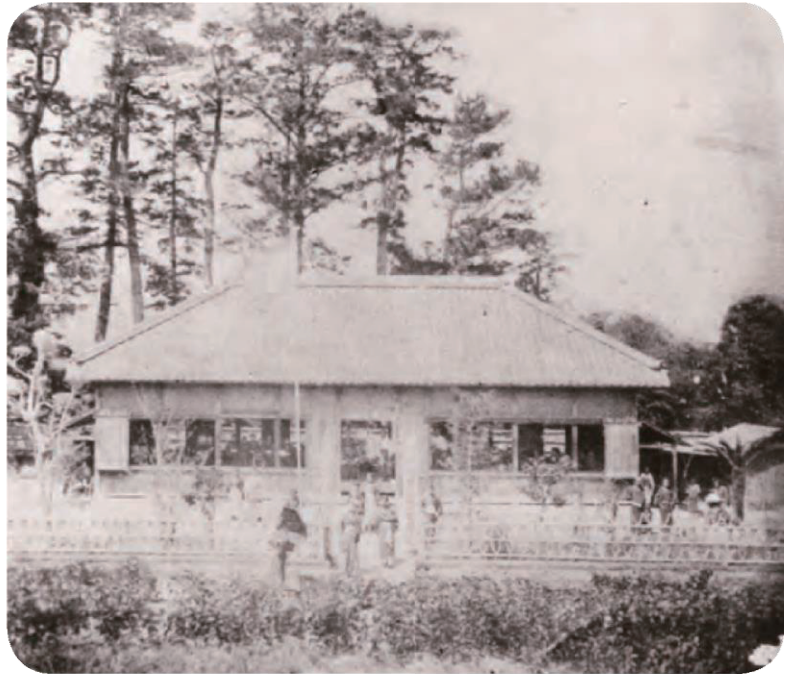
「ここの水はけをよくすれば、広い水田を作ることができる。」と考えた^{ようえむ}要衛武は、よぶんな水をとよりの^{よこすか}横須賀（今の^{かけがわ}掛川市）の海へ流させてもらおうと、横須賀の役人のところへたのみに行きました。

しかし、横須賀にとってはよその村のこのため、^{ねっ}要衛武がたのみに行ってもゆるされませんでした。また、浅羽の水が入ってくることで横須賀の川の水の流れが悪くなる心配もあったので、なかなかみとめてくれませんでした。しかし、^{ねっ}要衛武は何度もたのみに行きました。そして、ついに^{ねっ}要衛武の熱心さに負けて、役人は水を横須賀の海に流すことをゆるしてくれました。

それから10年ほどして、^{ひらしば}要衛武は20の村の代表として、平芝の役所につとめるようになりました。そのころ、^き生糸がますます高いねだんでアメリカへ売られていました。そこで、^え要衛武はくわ畑を作っかいこをかって生糸の元のマユを作ることを村人にすすめました。それから50年近く、この地方では生糸作りがお金を得るための^{よう}重要な仕事となりました。

また、^た学校を建てて子どもたちに教育を受けさせるようにという国のきまりができると、柴学校を建てるために、^ひかかった費用の350円のうち100円を^ふき付しました。

さらに、村の人たちが
かんたんにお金をためた
り、^か借りたりできるよう
にと、遠州地方で初めて
「^{かいめいしゃ}開明社」という銀行を
つくったり、^{ふくて}福田の港か
らとれた茶や生糸を運ぶ
ために「^{めいしんまる}明進丸」とい
う汽船をつくったりもし
ました。



^{しば}柴学校

それから10年ほどして、要衛武は東浅羽村の村長となりました。

そのころ、今の東海道線ができあがりました。これからは鉄道で
人や物を運ぶ時代になると考えた要衛武は、袋井駅から横須賀に向
かう道路へ、東浅羽村から道路をつなげる工事をしました。この新
しい道路は荷車もすれちがうことができる、地方の道路にしては大
^{へん}変りっぱなものでした。また、^{りゅうよう}竜洋（今の^{いわた}磐田市）に通じる道路を
作ったり、^{りょう}通行料金のかかった橋を買い取って^{むりょう}無料でわたれる橋と
したりして、村人のために^{はたら}働きました。



無料でわたれるようにした橋の今のすがた（^{ひろせ}広瀬橋）



すずきとうざぶろう
鈴木藤三郎

年	主なできごと
1855 <small>あんせい</small> (安政2)	森町に生まれる。
1859 <small>あんせい</small> (安政6)	おかし屋の養子となる。
1874 (明治7)	家の仕事をつぐ。
1877 (明治10)	氷砂糖の研究を始める。
1883 (明治16)	氷砂糖の作り方を発見する。
1895 (明治28)	<small>にほんせいせいとうかぶしきがいしゃ</small> 日本精製糖株式会社を作る。
1900 (明治33)	<small>たいわんせいせいとうかぶしきがいしゃ</small> 台湾製糖株式会社を作る。
1906 (明治39)	<small>しりつしゅうちのうりんがっこう</small> 私立周智農林学校を作る。
1907 (明治40)	<small>にほんしょうゆじょうぞうかぶしきがいしゃ</small> 日本醤油醸造株式会社を作る。
1913 (大正2)	58才で死去。
	死後、最後の特許 <small>とっきよ</small> (159件目)が認められる。

すずきとうざぶろう
鈴木藤三郎年表 (森町教育委員会「鈴木藤三郎関係年譜」より)

3 森町が生んだ発明王 はつめいおう 鈴木藤三郎 すずきとうざぶろう

鈴木藤三郎は、1855年(安政2年)、森町に生まれました。4才になると、町のおかし屋の養子となりました。藤三郎は、おさないころから、色々なことにこうきしんをもつ子供でした。まずしい家で育ちましたが、勉強熱心で、6才のときから、寺子屋で学びました。19才になると、家の仕事をつぎ、21才のころに、にのみやそんとく二宮尊徳の「報徳(ほうとく)の教え」を知ると、その教えを仕事に生かしていきました。藤三郎は、「おかし屋の仕事だけで終わりたくない。一生の仕事となるような大きな仕事をしたい。」と日ごろから考えていました。

そのころ、日本には、ドロップやキャラメルはなかったので、中国からゆにゆうされる茶色の氷砂糖がとぶように売られていました。アメリカやヨーロッパでは、どうめいでおいしい氷砂糖が作られていたので、藤三郎は、そのような良質の氷砂糖を作ることはできないかと考え、熱心に研究を続けました。

色々な方法を次から次へと試してみましたが、いずれも失敗をくり返すばかりでした。そんなことが長く続き、家族からは「どうか、そんなくだらないことはやめてくれ。」と言われるほどでした。

しかし、1883年（明治16）年5月、用事で東京に行き、留守にしている間に、ぐうぜん、なべの中にきれいなじゅんぱくの氷砂糖のけっしょうができていることを発見しました。藤三郎は、なぜきれいな氷砂糖ができたのかを考え、さらに研究を続けました。真夏の暑い中、小屋にこもり、丸二日間、かまどを燃やし続けました。そして、ついに、完全な製品を作ることに成功しました。これは、藤三郎が氷砂糖の研究を始めてから7年目のことでした。



「氷砂糖発明」
（「森町むかしといま」）より

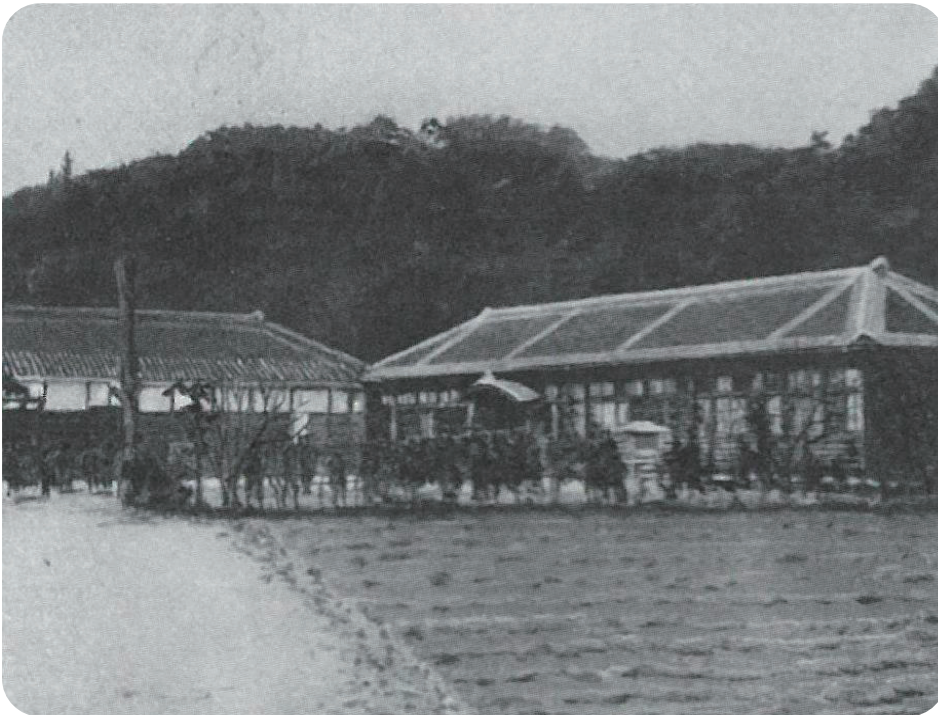
その後、藤三郎は、森町に氷砂糖製造工場を設立し、すぐに東京に工場を作る計画を立てました。

この工場は1889年(明治22年)に完成し、「鈴木製糖所(すずきせいとうじょ)」と名付け、1895年(明治28年)には、「日本精製糖株式会社(にほんせいせいとうかぶしきがいしゃ)」となりました。これは藤三郎が40才のときでした。また、45才のときには、台湾に「台湾製糖株式会社(たいわんせいとうかぶしきがいしゃ)」を作り、外国からの砂糖の輸入を全てなくすことに成功しました。それだけでなく、52才のときには、「日本醤油醸造株式会社(しょうゆを作る会社)」も作りしました。

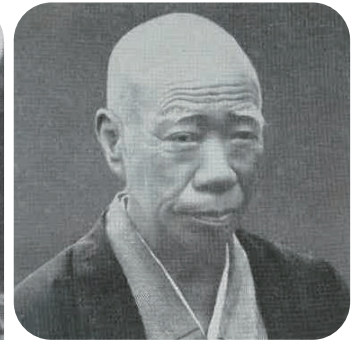


日本精製糖工場図(個人蔵)

また「学ぶことが生活を豊かにする」と考えました。そこで、若者に最新の農業について学ばせることを目的に、1906年（明治39年）福川泉吾と共にお金を出し合い、私立周智農林学校（今の遠江総合高校）を設立しました。



しゅうちのうりんがっこう（そうりつとうしょ）
周智農林学校（創立当初）



ふくかわ せんご
福川 泉吾

これ以外にも、1913年（大正2年）に58才で亡くなるまで、かんそうきやボイラーなどの数多くの発明品を生み出し、全部で159件の特許を取りました。その活躍から「郷土の発明王」と言われました。